

バベルの塔の物語
—多文化理解の観点から—

磯 山 甚 一

The Story of the Tower of Babel
—from the standpoint of multicultural understanding—

Jinichi Isoyama

The story of Babel in the Old Testament is about how the diversification of languages was brought about. The language difference constituted, and still does, the core of the cultural differences. The mythical Babel story can be said to be among the earliest documents that show what ancient people made out of the cultural differences among themselves. The story comes after the story of Noah's three sons, in which we find both the Yahwistic passages, and the Priestly writings. The present paper tries to find out what difference it makes when we read the Babel story as sequel to the Yahwistic passages of Noah's three sons.

Keywords: the Old Testament, Babel, cultural differences, variety of languages, Yahwistic passages.

バベルの塔

バベルの塔の物語は、キリスト教とユダヤ教の共通の聖典であり、「イスラエル・ユダヤ民族の歴史が書かれている」⁽¹⁾、旧約聖書の『創世記』に収められている。その物語は紀元前10世紀まで遡る時期に成立したと

考えられているが、不思議にも今日のグローバル化時代における英語—極集中の環境で言及されることが多いように私には思われる⁽²⁾。つまり、多様な文化を育んだ多様な言語について考えるときに、聖書に記述された言語の四散が、原初の風景として思い浮かべられる。

現在をバベルの物語の類推で思考することは理解できるが、果たしてどれほどの妥当性があるのか、不安がないわけではない。だがその物語は、何よりもまず言語にまつわる物語であり、言語について書かれた最古のテキストのひとつに属することは確かであろう。そして言語とは、まさにわれわれが相互に異なる多様な「文化」を育んできたことを目の当たりに確認させてくれる明確な指標である。われわれは、自分の言語と違う言語を母語として育った他者がいて、自分に通じない言語を話すことを、経験的に知っている——なぜあの人を私を理解しないのか、私はあの人を理解できないのか、と。かくして言語は、異なる「文化」が相互に他者を確認する際の核心部を構成してきた。

バベルの塔の物語とはどういう物語か。旧約聖書では、最初に置かれた五書がいわゆる「モーセの五書（ギリシャ語でペンタテウコス（Pentateuchos）、「五つの巻物」の意）」、あるいはユダヤ教では「律法（トーラー）」と呼ばれる。モーセの五書の名称のとおり、それらの書の成立には、古代イスラエル民族の形成過程で指導者であった人物モーセ（前13世紀）が極めて重要で、モーセが人々を率いたエジプト脱出が民族形成を決定付けたといわれる。しかしモーセのそれらの活動後に、すぐにその五書が成立するわけではないし、その名を付されたモーセが著者のわけでもない。モーセ以前と以後に書かれた文書があり、それらを基盤にきわめて長期間の編集作業が続けられ、前5世紀から4世紀までに五つの文書としてほぼ成立したと考えられている⁽³⁾。古代のナイル川からユーフラテス川にかけての世界の、気の遠くなるような極めて長期間の

思考の結果として、モーセの五書がある。

そうならば、バベルの物語の「語り手」という言い方は可能としても、「作者」や「著者」は想定しにくく、むしろ物語の「編集者」という言い方がより適切であるという。本文研究の成果によれば、『創世記』を含むモーセの五書を構成する資料として、「ヤハウエ資料」「エロヒム資料」「申命記資料」「祭司資料」がある。これらは今日ではモーセの五書のテキスト中でどの資料に属するか、相互に区別する目印はない。『創世記』には、「ヤハウエ資料」と「祭司資料」が含まれる。例えば冒頭の第一章、および第二章冒頭部にあたる天地創造の物語は「祭司資料」に属する。第二章の残り、男と女の創造の物語から第四章までは、「ヤハウエ資料」に属する。さらに進んで、ノアの洪水の物語は「ヤハウエ資料」と「祭司資料」が渾然一体となっている。

洪水物語に続いてバベルの塔の物語があり、それは「ヤハウエ資料」である⁽⁴⁾。「ヤハウエ資料」の特徴は、ヤハウエ神が人間の前に姿を現して、「神自身がさまざまな具体的な行為を行っている」⁽⁵⁾ことである。例えば、ヤハウエは自分の創造した男と女のエデンの園に姿を現す。二人は、「ヤハウエ神の足音を聞いた」。そして、バベルの塔の建設の現場には、ヤハウエが「降りて来」る⁽⁶⁾。

バベルの塔の物語は、直前に配置されたノアの三人の子の物語とのつながりで読むことが重要であると思われる。ノアの三人の子の物語は、ヤハウエ資料と祭司資料が渾然一体となっており、古くから伝わるヤハウエ資料に、祭司資料が新たに付け加えられた形で編集されたと考えられる。追加された祭司資料の特徴は、ノアの子らの系譜を詳述していること、ノアの系譜に連なる人々について、「民族」「種族」「国」という語彙を新たに加えて分類し、それぞれの「国語」があると断言していることである⁽⁷⁾。これらはまさに今日の「文化」を構成する核心であり、

編集者が今日でいう文化的差異をどのように理解していたかを探る上で非常に興味深い。

続くバベルの塔の物語は、すべてヤハウエ資料に属する。祭司資料が追加編集される前の状態では、ノアの三人の子らの物語からバベルの物語へ、ヤハウエ資料として連続していたと想定される。それに対して祭司資料の編集者たちは、「民族」や「国語」という新たな考え方をノアの子らの物語に付け加えて、その上でバベルの物語につなげた。第九章から第一〇章のノアの子らの物語は、ヤハウエ資料と祭司資料を別欄にして掲載してみると、その追加の特徴がよくわかる（付属資料参照）。バベルの物語の舞台は冒頭では「シナル」となっているが、最後に明らかにされるとおり、それはユーフラテス川流域に実在した「バビロン」の町を含む土地である。「バベル」とは、ヘブライ語で「バビロン」のことである⁽⁸⁾という。

何が書かれているのか

バベルの物語で何が語られるか、ノアの三人の子らの物語から続きとしてバベルの物語を読むとどうなるか、「ヤハウエ資料」と「祭司資料」の差異を明らかにしつつ整理してみよう。バベルの物語はまず、「全地は同じ言語を持ち、同じ言語を話していた」という、過去の認識から始まる。この認識は、ノアの洪水の後で、第九章の一九節で述べられるとおり、ノアの三人の子の名前をあげ、「全地の民は彼らから別れ出た」と述べたことに連なる認識である。「全地」はいずれにしても曖昧な言い方である。

過去に関するその認識は、バベルの塔の事件が起こる現在についての資料編集者たちの認識と対応する。事件現在の認識が、ヤハウエ資料と祭司資料では内容がだいぶ異なるからである。祭司資料に属する部分は、

バベルの塔の物語の前にすでに「民族、種族、国、国語」の分岐があったと明記している。ヤハウエ資料の部分では、「民族、種族、国、国語」の違いについて言及はないので、せいぜい、「種族」と述べるにとどまり、民族や国、国語と名づけるほどの分岐はない、ということである。

バベルの物語の冒頭にある「全地は同じ言語を持ち、同じ言語を話していた」という過去の認識は、ヤハウエ資料の場合からつなげる場合は、ノアの三人の子らから分かれた「全地の民」と理解できる。ヤハウエ資料の編集者は、ノアから別れ出た人々が現在では「種族」程度には分化していると認識するが、それらの人々の集団は、いまだに「民族」や「国」ではないという。ところが祭司資料の編集者は、すでに「民族」「国」として語れる人々の集団が出現しており、それぞれがそれぞれに固有の「国語」を持つと述べる。

『創世記』は、そのタイトルも暗示するとおり、様々なことの始まりを語る。その中でもバベルの塔の物語は、人間の言語の始まりをテーマとする内容を持つ。すなわち、初めは全地が「同じ言語」であった、と。この同じ言語とは、ヤハウエ資料のテキストの文脈からの帰結としては、洪水を生き延びたノアの言語、ノアが三人の子ら——セム、ハム、ヤベテ——を育てた言語である。ヤハウエ資料の伝えるバベルの塔の物語は、ノアの言語を話す「全地の人々」に対し、ヤハウエの罰が下って言語が分岐したことを伝えることになる。

ただし、ノアの言語がどう始まったかについては言及がない。『創世記』の内容を遡っても、ヤハウエ資料には言語の始まりについての記述はない。祭司資料では、言語の始まりは神の天地創造の始めまで遡る。『創世記』の第一章冒頭で、「神は「光あれよ」と言われ」たと記述されるからである。祭司資料が伝える神の天地創造に際して、「神の靈風」とともに、「光あれよ」という言明を含むヘブライ語の言語体系は所与で

あった。言語がどう始まったかについて『創世記』は語らない。バベルの塔の物語が語るのは、その言語の分岐の事情だけである。

さらに、全地が同じ言語を話していたというとき、「同じ」の根拠は何かも問題であろうが、全地の人々がヘブライ語を話していたと理解していいだろう。神が天地を創造する際に用いた言語であり、神がノアに洪水を伝え、ノアが三人の子らを育てた言語である。ヤハウエ資料の伝えるとおり全地の人々が種族程度にしか分岐していないとしても、その人々はかなりの広範囲な地域に分かれて同じ言語を話していた。今日の場合を考えてみても、同じ「日本語」「英語」でも、東北と東京と九州の「日本語」には違いがあるし、ブリティッシュとアメリカンでは差があるが、同じ日本語、英語とされる。

続いてバベルの物語は、「人々は東の方から移って、シナルの地に平地を見つけて、そこに住みついた」と記述する。これらの「人々」は、ヤハウエ資料の文脈で考えても、「全地の人々」の全部とは言われていない。ノアの三人の子から分かれ出た人々のうちの一部である。それらの人々が、シナルの地に平地を見つけ、町を建てた。「彼らは石のかわりに煉瓦を、粘土のかわりに瀝青を用いるようになった」という記述は、その「彼ら」がどのような人々について手がかりを暗示する。煉瓦や瀝青を用いた人々の記録があれば、それが当てはまる。

しかし祭司資料の文脈では、ノアの子らの子孫はすでに各地の「民族、種族、国」に分岐してそれぞれの「国語」を話しており、バベルの事件が起きる以前にすでに言語は分岐していた。この場合も、「全地の人々」がシナルの地に来たわけではない。物語の最後にその地がバビロンであることが明らかにされるから、その人々とは「民族、種族、国」に分かれたうちの、バビロニア人であろう⁽⁹⁾。

その人々はそのシナルの土地で町を建設し、「天に達する一つの塔」

を建て始めた。なぜ塔を建て始めたのか？塔を建てることで、「われわれの名を有名にしよう」とした。なぜなら、「全地の面に散らされるといけないから」だという。その人々は「全地の面に散らされる」ことが可能性としてありうることを知っていて、あえて塔を建て始めた。そうだとすれば、塔を建てるのは、ヤハウエ神に対する挑戦であった。ヤハウエ神は、いまだに人々に対して絶対的な力を確立していない。人々の挑戦を許している。

あるいはその人々は、ヤハウエ神とは別の神を信仰する人々だろうか。だとすればバベルの物語は、ヤハウエ神と別の神の相互の争いを暗示するかもしれない。その人々はその名を有名にすることは、別の神を信仰する人々の力が大きくなることかもしれない。それはヤハウエ神を信仰する人々が敗北を喫することを意味し、そうになると、ヤハウエ神が廃れることになるであろう。

歴史学的にも、ヤハウエ資料が成立するはるか以前の紀元前2千年紀の時期においてバビロニアが栄えたとされ、このような塔がバビロニアに実際に建設されて「ズイクラト」と呼ばれた¹⁰⁾。塔を建てることは、たとえば紀元前2千5百年紀にはエジプトでもすでに始まっていたので、メソポタミア文明として栄えたバビロンで建造されたとしても不思議ではない。エジプトのピラミッドで分かるように、それらの建設には膨大な数の奴隷などの労役が必要であった。ピラミッドに匹敵するような建造物があったとすれば、バビロニアにも相当の強大な政治的、宗教的権力が生まれていたとヤハウエ資料の編集者たちが知っていたことを暗示する。

続いてヤハウエ資料の編集者は、ヤハウエを登場させる。塔を建てようとしている人々の様子を見たヤハウエは、その「一つの民」に不可能なことはなくなるだろう、と述べる。塔の建設はヤハウエ神にとって不

都合な結末を暗示するので、ヤハウエ神はみずからの力で阻止しなければならない。そこでヤハウエ神は、人々の言葉が「たがいに通じないように」しようとした。その次のつながりが時間的に明確ではないが、人々は「全地の面に散らされた」、そしてその塔を建てることを放棄し、全地の面に散った。

ヤハウエ資料における二つの層

バベルの塔の物語は、その部分だけが単独で取り出されて読まれるのが今日では普通の受け止め方であろう。物語の冒頭で言われる「全地の人々」は、今日のグローバル化する世界の人々であったり、人間全般であったりと、旧約聖書のもともとの文脈から離れて普遍的な意味を込めて読まれる。それはそれで非常に示唆に富む、面白い読み方であることは間違いない。

ここでは、その物語がヤハウエ資料であることを確認し、『創世記』のノアの子らの系譜を語る第一〇章のヤハウエ資料との連続で読もうと試みている。そうすると、次の三つの内容を含むことは直観的に理解できる。

- ①言語に関わる認識。同じ言語を話していた一つの民が、異なる言語をもつ、異なる集団を形成するようになったこと。
- ②ヤハウエの意思についての認識。①のような結果になったのは、その民とヤハウエとの競争の結果として、ヤハウエが下した罰であること。
- ③歴史に関する認識。シナルの土地に移ってきた人々が町を建設し、高い塔を建設しようとした。そこはバベルという町であること。

このうち、①と②は、言語についてのヤハウエ資料編集者の認識であ

る。ヤハウエ資料の編集者は、バベルの事件後の現在では、全地の人々は異なる言語を持ち、異なる集団を作っていると認識している。けれども、バベルの事件前の過去に遡ると、全地が同じ言語であって、言語の分岐をもたらしたのは、バベルの事件が決定的契機であったと述べる。ヤハウエ資料の編集者は、男と女から始まる人間の創造の物語をすでに編集したか、あるいは編集しつつあった。人間の起源を語る編集者が言語の起源を考えることは当然であったが、彼らは言語の多様化をヤハウエ神が下した罰の結果として叙述しただけで、言語の起源そのものには、残念ながら、言及しなかった。言語は所与であった。

これと③のシナルの地名を付した部分は、物語の別の層に属するとして区別すべきであろう。上のような言語に関する認識を語るために、バビロニアに関わる特定の歴史的伝承、または歴史的記録が利用された。言語の起源や言語の分岐にかかわる層は、それだけを語ろうとすれば、記録に残らないくらいはるか過去の、歴史以前にまで遡った時間幅に属する内容になる。それは、思弁的な記述とならざるを得ない。それはこのヤハウエ資料の編集者に不可能ではなかつただろうが、編集者は、人間たちの地上の世界に姿を現し、人間と交わるヤハウエを登場させて、より具体的な物語に仕上げて見せた。

バベルの塔の物語がこのように重層的になっていることは、「バベル」という語そのものが証明する。語り手は、「それゆえその町の名を乱れ(バベル)と呼ぶのである」と述べる。一方で「[バベル]とはヘブライ語で「バビロン」のことである」から、歴史的な特定の地名を指す語として「バベル」が用いられる。他方で語り手は、「乱れ」という意味での「バベル」を用いている。こちらは歴史とは関係のない、特定の語の意味に関する言明であり、かつて一つの言語であったものが、「乱れ」ることによって、多くの言語に分かれた、というふうにつながる。言語の分岐は「乱

れ」なのだ。

祭司資料における言語の分岐

では、祭司資料を含めたノアの子らの物語から連続させたとき、バベルでの事件はどのように理解できるであろうか。祭司資料を含めてノアの子らの物語を通読すると、バベルの事件以前にすでに「民族、種族、国」に分かれた人々がいて、それぞれに「国語」を持っていたと記述される。その後では、バベルの事件が起こったとしても、言語の分岐をテーマとする物語としては、意味がなくなる。すでに言語は分岐しているからである。

祭司資料の編集者が、ノアの子らの民族と言語の分岐を記述した後で、その前後関係（シークエンス）の位置にわざわざバベルの物語を置いたことの意味は何か。祭司資料の編集者にとって、そのような歴史的な前後関係の矛盾は重要ではなかった、という可能性もありうるが、しかし、その編集者は、自分たちの編集した天地創造の物語を『創世記』の冒頭に置き、ヤハウェ資料の人間創造の物語よりも前に置くことにしたという、われわれにも普通に通じる時間感覚、または歴史感覚をそなえた編集者であった。時間的に前に起こるはずのことは、前に記述するのが当然のはずである。

ひとつの考え方として、バベルの物語に「古代オリエント世界の覇者バビロン」に対する批判を読むことからその疑問に解答が導けるかもしれない。すなわち、「バベルの塔の物語は……古来、人間と人間集団を駆り立ててきた名誉欲、権力欲、征服志向といった欲望、一言で言えば覇権主義を、天界の王ヤハウェに対する反逆とみなしている。しかも、古代オリエント世界の覇者バビロンを名指しで批判する」⁽¹¹⁾と。

もちろん、ヤハウェ資料の流れに位置づけて読む場合にも、バビロン

に対する批判として読むことはできる。その場合にもバビロンの地名がそこにあることは変わらないからだ。しかし、ヤハウェ資料の流れで読む場合は、バベルでの事件は一回性の、不可逆的な出来事として起こることになろう。言語の分岐はその事件を契機として初めて起きたのであって、繰り返されることはなく、戻ることはありえず、その事件を境にして「全地」の人々がヤハウェの罰を受け、その呪いの下に入ることになる。ちょうど、男と女が智慧の実を食べて楽園を追放されたことが、不可逆的な人間の条件になったとされるように。ヤハウェ資料の流れで読むバベルの物語は、より広い適用範囲を帯びることになる。

一方で、祭司資料を含めた流れで読む場合には、すでに言語の分岐が起きてしまっていた現在に、あらためてバベルの事件が起きた。ヤハウェ神の下す罰の標的は、バビロンで塔を建てようとしていた人々である。別の民族に属して異なる言語の人々にバベルの呪いは及ぶことはないだろう。だが、ヤハウェの罰は、これからも下される可能性があることになろう。すでに分岐していた言語を、さらに分岐させたからである。その罰を受けると、その人々は一つの民でなくなり、相互にコミュニケーションは不可能になり、一緒に塔を建てることはできず、四散するしかないであろう。すでに言語の異なる「民族、種族、国」に分かれて、それぞれの民族、種族、国で住んでいた人々は、ヤハウェの呪いを受けていたのかもしれないし、そうでなかったかもしれない。祭司資料の編集者はどちらであったかについて言及しない。

祭司資料に続けて読むことにおいてバベルの塔の建設が失敗に帰したことには、もうひとつの解釈がありうる。その場所がバビロンであることが特に重要になる読み方で、バビロンで信仰の対象となっていた神と、それに対抗するヤハウェとの争いとその物語の透かし絵として隠されているとする解釈である。バビロンの神とヤハウェ神の対抗、具体的には、

バビロンの守護神マルドゥク⁽¹²⁾に対する、ヤハウエ神の敵対的な態度を表すと理解するのである。だとすれば、バビロンで塔が建設できなくなり、人々が自分たちの名を有名にできずに結局四散したのは、ヤハウエの勝利を暗示する。それは、ヤハウエを信仰しない人々に対する呪いであるが、同時に、ヤハウエを信仰することに対するヤハウエの祝福を暗示するであろう。この点でヤハウエ神は、自分を信仰しなかったり、あるいは自分に対する挑戦とみなす事を試みたりする人々に対し、不寛容な態度で容赦なく罰を与え、呪いをかける神なのである。

智慧の実の物語とバベルの物語

言語の起源に関わるバベルの物語は、人間の誕生を男と女の創造によって説明したことに比せられる想像力の技と言えるであろう。言語も人間もどちらも、歴史時代のはるかかなた、いまだに文字のなかった頃、歴史の闇の中に起源をもつはずである。ここではバベルの物語を、人間が智慧の実を食べ、ヤハウエが罰を下して人間が呪われたとする事件とを比較してみたい。

同じ『創世記』に属するが、人間の男と女が善悪と智慧の樹の実を食べた事件に比べ、言語の分岐の物語は歴史性が強まっているように見える。歴史のかなたの最初の人間の頃よりは、人々の数も増大してからのこととして、バベル（バビロン）という具体的な実在する地名が用いられるからであろう。しかしそれでも、「全地」が同じ言語を話していた、と言えるくらいには、まだまだ分化されていない頃のことであったと想定されている。

人間創造の物語は、人間の男女が善悪の智慧の樹から食べたことを語る。結果としてヤハウエ神の呪いがかけられ、善悪を知ることになる。さらにヤハウエ神は、人が生命の樹から取って食べて永久に生きるよう

になってはいけなと恐れた。それで、人をエデンの園から追い出し、土に帰るだろう、死ぬことになるだろうと呪いをかけ、生命の樹に近づけないようにわざわざ「ケルビムと自転する剣の炎」を見張り役とした。ヤハウエ資料はさらに、追放された女はすべての生けるものの母となった、と述べる。ということは、すべての人がこの呪いを引き受けるだろう言っている。

だが、これは果たして人間の受けた「呪い」であろうか。今日の神を関与させない考え方から言えば、人間的な生存の条件であろう。人は知恵を持ち、すべて死ぬ運命にある。ヤハウエ資料はそれをヤハウエ神の罰の結果とみなし、呪いであるとみなす。同じことが、バベルの塔の物語にも言える。人間の言語は数々に分岐している。ヤハウエ資料の編集者も、祭司資料の編集者も知っていて、過去に遡って全地の言語の統一を物語った。その統一は誰も確認したわけではない。言語の分岐は、人間の死ぬ運命と同様に、人間的な生存の条件である。それをヤハウエ神の与えた罰の結果である、呪いであるとみなす。

言語の分岐を罰の結果であると認識すれば、もたらされる結果は悲惨なものでありうる。少数者しか話者のいない言語が発見され、その言語に特有の独特の文化を営む集団がいたとしよう。ヤハウエ神を信仰する力の強い人々がその集団を発見したとすると、その人々の目にその集団はどう映るか？ 神の罰を受けて、呪われた結果としてのチンプンカンプンの言語を持つのだと見なされるだろう。神の呪いを受けて四散した、神の祝福から見放された哀れな人々である。その人々は憐れみを受け、おそらくヤハウエ神の祝福を受けた言語を習得させられるであろう。お節介どころではなく、それこそが祝福へとつながる道なのだ。

(注)

- (1) 山我哲雄『聖書時代史 旧約篇』(岩波現代文庫、2003年)、vi頁。
- (2) 例えば、G・スタイナー『自伝』(みすず書房、1998年)の特に第7章がバベルの塔の物語に言及している。さらに同じ著者の *My Unwritten Books* (New Directions Books, 2008) には 'THE TONGUES OF EROS' と題された章があり、言語の分岐は呪いではなく、かえって「祝福であり、歓喜である」と述べる。さらに文教大学大学院言語文化研究科10周年記念に川村湊氏は「日本語と日本文学」と題して講演し、英語の一極集中に対する反動としてバベルの塔の物語は繰り返すはずだと述べた。

これらの趣旨は、言語の分岐、多様性によって、標準化されない感情の表出手段、個に則した表現手段が与えられるということであろう。

バベルでの出来事はヤハウエが下した罰であって、言語の分岐は人間が受けた呪いであるとする考え方が今日では支配的であろう。そのおかげでわれわれは、異なる言語間では翻訳や通訳の作業を経なければ相互にコミュニケーションは不可能になっている。異なる言語を持つ異なる文化相互に葛藤が絶えず起こり続け、戦争などの悲惨がなくなることはない、と。

- (3) 加藤隆『旧約聖書の誕生』(筑摩書房、2008年)、14頁、29～30頁。
- (4) 同書、「付録 モーセ五書資料表 (vii～xi頁)」に基づく。
- (5) 同書、100頁。
- (6) 聖書本文のテキストは、関根正雄訳『旧約聖書 創世記』(岩波文庫、1956年)による。
- (7) 邦訳で「民族、種族、国、国語」と訳されている語彙が、ヘブライ語原典ではどのような意味内容を持つ語が用いられているのか、

ここで確認することはできない。聖書では今日で言うところの「文化」にあたる語彙は用いられないように思われるので、今日的な意味での「文化」について考える際には、これらにあたるヘブライ語の語彙の意味内容は重要になるであろう。

American Bible Societyから発行されている英語版の*THE BIBLE*から以下に引用しておきたい。邦訳との対応で言えば、familyが「種族」、nationが「民族」、landが「国」、languageが「国語」である。日本聖書協会発行の新共同訳『聖書』では、familyは「氏族」、nationは「民族」、landは「地域」、languageは「言語」と訳されており、より今日的な意識で訳語が当てられていると思われる。第一〇章の五「以上がヤベテの子らで、これらから諸民族の島々は分かれ出たものである。それらは、その国にあって、その国語に従い、その民族にあって、その種族ごとに住んだ。」

“From these the coastland peoples spread. These are the sons of Japheth in their lands, each with his own language, by their families, in their nations.”

第一〇章の二〇「以上がハムの子らをその種族と国語に従い、その国と国語に従い、その国と民族とによってあげたものである。」

“These are the sons of Ham, by their families, their languages, their lands, and their nations.”

第一〇章の三一～三二「以上がセムの子らをその種族と国語に従い、その国と民族によってあげたものである。」

以上がノアの子らの各種族であり、その系図に従い、その民族に応じてあげたものである。洪水の後、諸民族はこれらから地上に分かれ出たのであった。」

“These are the sons of Shem, by their families, their languages,

their lands, and their nations.

These are the families of the sons of Noah, according to their genealogies, in their nations; and from these the nations spread abroad on the earth after the flood.”

- (8) 石田友雄『聖書を読みとく 天地創造からバベルの塔まで』（草思社、2004年）、220頁。
- (9) 石田友雄、同書、224頁。
- (10) 石田友雄、同書、222～3頁。
- (11) 石田友雄、同書、227頁。
- (12) 石田友雄、同書、46頁。